
Magical Girl Lyrical NANOHA -PHASE LIMITED-

ポロロッカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c a l G i r l L y r i c a l N A N O H A
P H A S E L I M I T E D -

【Nコード】

N7542V

【作者名】

ポロロツカ

【あらすじ】

渡良瀬彩貴は、私立聖祥大学付属小学校に通う4年生。

おかしな親友とその他諸々クラスメイト達と共に面白おかしく平和にくらしていたのだが、ある日クラスに転校生がやってきて……？

騒がしくも楽しい日常に彩貴が四苦八苦しながら立ち向かっていく中、裏では着実に非日常が迫っていた。

そして、自分の知らない真実を知ったとき彩貴はどんな答えを導き出すのか！

……と、いう感じで書いていくつもり（予定の）SSです。
お暇なときでもいいので、読んでいただけると嬉しいですー

プロローグ

L y r i c a l N A N O H A - P H A S E L I M I T E D -
M a g i c a l G i r l

O l o g u e

p r

薄暗い。

3

通路を歩きながらルクスは、あまりの陰湿さに薄ら寒さを感じる。

人の気配が全くしないというのも、気が滅入る。

だからと言って、進まないわけにもいかないのだが。

ここは現在ルクスが追っているテロリストの施設内。

これまでも幾つか施設やアジトを発見し検挙してきた。捕まえたテロリストの人数も数知れない。

そして、今回もその一つなのだが今までとは違い大変苦労して場所を見つけた。

今までに比べて特に情報が少なく特に発見するのに時間が掛かったのだ。

見つかりにくかったということは敵も出来るだけ隠したかった要所のだろう。

そんなわけで気合を入れて警戒しつつ侵入を試みたのだが。

「……監視カメラの一つもないのか」

思っていたより容易に入ることが出来てルクスは若干拍子抜けしていた。

すでに隠れるつもりもなく、今は通路のど真ん中を堂々と歩いている。

一応、警備員は居たのだが増援を含めて全員気絶させておいた。

だが、それもあまりにも不可解だった。警備員は比較的武装の薄く簡単に倒すことが出来た。

人数は増援を入れても10人程度。少なすぎる。

それに警備員はどうも素人っぽく戦い慣れしていなかった。戦闘員では無いようだったのだ。

これなら他に敵がいてもおかしくないはずだとよりいっそう警戒

していたのだが……それ以来音沙汰なし。

隠れているような気配もなく無音だった。

まるでこの場所の主に侵入を許されたかのような。

流石に考えすぎか。

とりあえず今は警戒はしつつも別の問題に頭を切り替える。

うんざりしながら面倒くさそうに周囲を見渡した。

「しかし、まあ……こいつは、骨が折れる」

ルクスは通路を見渡して、ため息を吐いた。

通路が無駄に馬鹿でかいのだ。そもそも通路というよりもコンテナに近い。

しかし、『ご丁寧にでかかど』『中央通路』と入り口に書いてあるので通路なのに間違いはない模様。

恐らく重機や大きな機材を運びやすいように大きくしたのだろうが、これでは航空機が数台入るほどの大きさである。

さらに何処か重要そうな部屋を探そうにも無駄に入り口が多くて、何処に入ってもいいか分かったものではない。

これは侵入者にとっては厄介だった。内部の構造図でもあれば問題なかったのだろうが、残念ながら手に入らなかった。

案内図が何処かにかと探しても見当たらない。親切なのか不親切なのかどっちかはつきりして欲しい気分だった。

それに堂々と真ん中を歩いている理由の一つも、正直広すぎて身を隠すものが見当たらず隠れながら進むのは不可能だからというのもあったりする。

とりあえず、奥まで行ってみるしかない。

そう思い立って、行けるところまで行くつもりでいた。

それから、うんざりするほど歩いていると何とか行き止まりらしき場所にたどり着く。

見渡す限り壁なので恐らくそうだ。

しかし、特に入り口らしいものは周囲には見当たらない。

ふむ、と壁を見渡すが扉らしきものや電子ロックのようなものは見当たらなかった。

妙だな。

これだけの大きな通路。今まで見て来たものは通常サイズのドアばかり。

わざわざ大きくしたのなら、それ相応のサイズのシャッターでも

入り口でもあるはずである。

よくある方法を思いついて向こう側が空洞になっている場所はないかと壁を叩いてみるが音が変わるようなところは特にない。

ルクスは少し考えて、上を見て、下を見た。

「あつた」

ニヤリ、とルクスは笑みを浮かべる。

薄暗いので見づらいのだが足元の床が明らかに不自然だった。

ここに来るまで床には埋め込まれた配線のようなものが光を発していたのだが、ここら一帯にはそれがない。

少し戻ると光がある場所とない場所の境が顕著に現れていた。

床を足で数箇所、音がなるように叩いてみる。明らかに一定の位置を境に音の響きが違う。

地下。なんと言うか安易というかお約束というか。

バレにくくしているのを見る限り隠すつもりだったようだがあまりにも簡単すぎる。

設計者に呆れながら、空けてみることにした。

また周囲をぐるりと見渡せば、見つけてくださいと言わんばかりに床に変にでっばった部分がある。

そこまで歩いていってルクスは腰に下げていたノートPCを手に取ると端からソケットを引き伸ばして先端をこれでもかと言わんばかりに思いつきり床に突き刺す。

そして、すかさずPCを弄る。すると数分も経たずに鈍い音をたてて床が動き出した。

ぼっかり空いた床下を覗き込む。

そこには、地下に続くエレベーター。

これまた無駄に大きくてエレベーターには見えないのだが。

もう、今更驚きもしないので端にあったコンソールから一番深い場所にある階を選択する。

「ていうか、地下20階もあるのか……テロリストのくせにどれだけ金持ちなんだ」

ゴウン、と音を立てて地下に沈んでゆく。

下に行くにつれて明るくなっていくのが分かった。

どうも、メインは地下で上の方は大して重要でもないらしい。

そうであつたとしても、ここまで何事もなく来れたこと自体が怪しすぎるが。

地下は殆ど密室である。

エレベーターがあるため完全な密室ではないがもし逃げ出すようなことがあれば一苦勞だ。

やはり誘い込むのが敵の狙いなのだろうか。

まあ、いくら考えたところで侵入者の自分には何も分からないのだが。

そう時間も経たずに最下層までたどり着くエレベーター。

さて、どうでるかな。

扉が、ゆっくりと開く。

すると、そこには以外と普通に研究室が広がっていた。

オーソドックスで無機質な感じがする壁や床。何に使うか分からない数々の機材。

これはこれで探りがいがあつた。

「ここまで来たら、やるっきゃないか」

研究室のメインコンピュータ。

明らかにそれと分かる巨大なコンピュータに近づいて、簡単に操作してみる。

パスワード認証が幾つかあったが、そんなものは持っていたウイルスで簡単に解除することが出来た。

ぱつと見て分かる内部のデータはというと日誌、その他諸々どうでもいい書留、暇なときにやっていたのかゲームなど様々だ。

表面上は、だが。恐らくこれは見せ掛けだけのダミー。

中枢に入り込めるようにウイルス入りのPCから操作すると案の定、普通の入り方では見られないようになっていた。

サーバーがある。

完全に別回線にはなっていないようなので、ノートPCからメインサーバーに入り込んでやる。

すると研究資料と書かれたデータが幾つか存在することが分かった。

暗号化まではしていないようで、簡単に開くことが出来るようだ。

見つけたものをとりあえず自分のPCのモニターに表示してみる。

「……………これは」

内容を見て、少し驚く。

なんとデータは殆どがクローン技術について。

参考資料としてか記憶転写型クローン技術として一部では有名な『プロジェクトF』など様々なデータも揃っている。

良くここまで調べたものだと感じてしまうほどだった。

しかし、疑問も浮かんでくる。

テロリストがクローン技術を研究しているなんて、おかしな話だ。

よくよく見れば周りの設備も最新のものばかり。

このレベルなら普通大きな研究機関で行われるレベルのものである。不可解だった。

さらに、詳しく調べてみる。

データが莫大なので調べるのには苦労しながらも、ふとその中の一つに興味を引かれる一文があることを気がついた。

「クローンのプロトタイプか」

どうやら、テロリストは既にクローンを作っていたらしい。

内容をざっと確認する。

そこには、独自技術で作り上げたクローンのプロトタイプ的设计データ。生成過程。

作っていたクローンが既に完成まじかであることが記述されていた。

どうも遺伝子を改造して、戦闘に特化したクローンを製造するつもりらしい。

完成し実用化されれば色々厄介なことに使われるのは目に見えていた。

それにしても、と辺りを見渡すがクローンらしきものの姿は確認できない。

何処かにそのクローンの培養機でもあるはずなのだが。

コンピュータの操作盤にあるボタンを幾つか押してみた。

すると、メインモニターの上真上に筒状のカプセルが静かに現れる。

ゆっくりと視線を向ける。

その中に居た。テロリストが生み出したであろうクローンが。

顔の部分だけ見えるようになっていた培養機に浸かっていた。

完成していないからか髪の毛などは生えていないが、体の部分は

完成しているようだ。

見た目はまだ、物心がつくかつかないかくらいの幼い子ども。

生まれたのは最近のようなので、実年齢は違うのだろうか。

完成まじかと記述してあったのは恐らくこの状態では戦闘には使えないのである程度成長させるつもりなのだろう。

培養機自体には特に何も記されていないため、ノートPCに目を向ける。

他にもデータがないか探してみると、クローン元についての記述があった。

どうも、クローンの元になった遺伝子は何処からか盗んできたものらしい。

どうしてわざわざそんなことをやったのだろうか。遺伝子なんてどうにでもなると思っただが。

疑問符を浮かべながらさらに記述を進めていくとルクスは眉をひそめる。

見間違いかと思って何度も見直してみるがやはり間違いはない。

何故か、フォルダの一つに自分の名前が記述してあるではないか。

「……どう言うことだ？」

クローンについてはそう言うのがあると知っているくらいでルクス自身が詳しいわけじゃない。

なので自分の名前があることは、よく分からなかった。

それに自分の知らないところで自分自身についての何かが行われているというのは不気味だ。

だが、悩んでいても埒が明かない。意を決してフォルダを開いて中身を見る。

なんだこれ……？

ルクスは、その内容に啞然とした。

「……おいおい、冗談だろ？」

フォルダの中にある資料やテキストを片っ端から開いていく。

ルクスの顔から、次第に余裕が消えていった。

意味が分からない。記述の内容を理解していても体が受け付けない。

間違いなんじゃないかと何度も見直すが結果は変わらない。

「一体何が……どうなってる？」

培養機の中の子どもに視線を向ける。安らかに眠り続けるその子。じっと眺める。

似ている。そうだ、最初に見たときから何となく感じ取ってはいたのだ。

今思えば、面影が確かに合致している。

そして案の定その予感は的中していた。当たり前だった。間違えるはずがない。分からないはずがない。

何故なら、何故ならその子は。

”死んだはずの自分の子どものクローン” だったのだから。

状況が飲み込めなかった。こんな急展開、誰が予想できるものか。混乱を収めようとしても、頭が働かない。

こんなのどうすればいい？

分からない。どうすればいいか考え付かない。

心を落ち着けようと、培養機に目を向ける。

もう、注意力なんてとっくの昔に無くなっていた。

だから、ルクスは気がつけなかった。己の背後に、迫っていた存在に。

トンと、何か強い衝撃を自分の体を感じた。

はっとして何が起きたか分からず左右を見渡すが何も無い。

その時、ふと胸に生暖かいものを感じた。下を向く。

何故か自分の胸から刃物が突き出ていた。

服は真っ赤に染まり血がとめどなく流れている。

一瞬、何が起きたか分からなかった。呆然としながらナイフを眺める。

混乱に混乱が重なって、冷静になるのに時間がかかった。

……ゆっくりと後ろを振り向く。

「あなたが悪いんだから……あなたが」

うわごとのようにしきりに何かを呟く女が一人、自分の背中にナイフを突き立てていた。

視線が合う。女は目を大きく見開いて自分の白衣を染めた返り血に気がつくともナイフから手を放した。

こみ上げてきた何かを吐き出す。血だ。

その気持ち悪いくらいの赤色が引き金となって急に頭が働き出す。

ルクスは驚く。自分が刺されたことをようやく理解した。

それと同時に体も理解したのか視界が揺らいだ。立っていられず膝を突く。

段々と自分の体から体温が消えていつていることが分かった。

しかし、ルクスはまるで人事のように自分の状態を感じ取っていた。

今現在、死の恐怖というものは別段ない。

何故か？

それはもう、自分が今何が出来て何をやるべきか既に定まっていたからだ。

培養機をもう一度見てニヤリと笑う。

「……仕方ねえな。連れて帰るか」

ルクスは培養機に向かって、一步踏み出した。

i
n

r
o
l
o
g
u
e

r
i
c
a
l
N
A
N
O
H
A

-
P
H
A
S
E
L
I
M
I
T
E
D
-

M
a
g
i
c
a
l
G
i
r
l
L
y

f

p

プロローグ（後書き）

はじめまして、ポロロッカと申します

今回、プロローグだけです。初めて投稿させていただきました。

まだ慣れませんが、これからも随時投稿していくつもりですのでよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7542v/>

Magical Girl Lyrical NANOHA -PHASE LIMITED-

2011年10月9日04時36分発行